

俳句・短歌の選者よりひとこと

このたび「杜の都・仙台 令和版 わがまち緑の名所100選」俳句の部の選句を担当した。光栄なことと心を熱くして臨んだ。応募句は約2,000句。応募者の熱情に応えるべく改めて各所を巡った。地名はその地の歴史や成り立ちを語ってくれる。アスファルト一枚剥がせば黒々とした大地が現れる。それらの大地の声やみどり滴る木々の声に耳を傾けようと思った。12年前の東日本大震災で大きな変貌を遂げた幾つかの地区があった。蒲生地区など最たるものだろう。かつては松林が広がり養鯉場や厩舎などが点在した絶好の吟行地であった。それが津波の浸食で日和山の標高が3mに、震災の犠牲となられた多くの人々の名を刻んだ慰霊碑が、なかの伝承の丘に祀られている。そして高い防潮堤が築かれた一帯は工場地帯と化していた。

風化し易い人間の記憶を、俳句という言葉の器を通して後世に残せる一助になることに携われた喜びを記してあとがきとしたい。

坂内 佳禰

公益社団法人 俳人協会評議員／宮城県俳句協会副会長

「杜の都・仙台 令和版 わがまち緑の名所100選」ガイドブック掲載作品募集に、455首の作品が寄せられました。

短歌は心を綴り、その日その時を残す詩型です。春の緑の美しさを詠んだ「定禅寺ケヤキの風に深呼吸 ビルの窓にも葉緑映えて」(「仙台四季の彩」に掲載)は、春の櫻の生命力を全身で感じ、その緑の中にいることの幸を「深呼吸」で表しています。下の句は、2022年の定禅寺通の春の景を詠み残しています。

思い出深い場所、心惹かれて訪れた場所、長い年月を親しんできた場所などに、心を寄せて詠んだ作品が多くありました。詠むことによって、その場所とその四季を、あらためて見直すという感慨もあったと思います。

このガイドブックが、今を生きる人たちの心を潤す一冊となることを願います。

斉藤 梢

現代歌人協会／日本歌人クラブ